

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：17701  
研究種目：研究活動スタート支援  
研究期間：2018～2020  
課題番号：18H05571・19K20781  
研究課題名（和文）フランス科学認識論の倫理的射程に関する研究

研究課題名（英文）The Ethics of French Epistemology

研究代表者

藤井 千佳世（FUJII, Chikayo）

鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・助教

研究者番号：10569289

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本課題の研究目的はフランス科学認識論、特にカンギレムの医学哲学とシモンドンの個体化論の倫理的射程を明らかにすることである。本研究において次の点が明らかになった。1/カンギレムの医学哲学と、従来の倫理理論、生命倫理学との射程の違い、2/シモンドンの個体化論における生物学的着想の倫理学への展開、3/カンギレムの医学哲学における個体主義と科学者の責任の問題の連関。

一連の研究から、科学思想史の領域に留まらない、フランス科学認識論の倫理的意義が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カンギレムやシモンドンの倫理学のベースにあるのは、環境に対峙し、立ち止まりながら、環境に合わせて自らを変容せざるを得ないような主体（生命個体）である。従来の哲学、倫理学において、このような流動的な主体は消極的に理解されてきたが、カンギレムやシモンドンの哲学においては、個体は、個体化の一つの位相でしかあり得ないからこそ、倫理的に積極的な価値のあるものとみなされる。一連の研究から、人間主義や人格主義とは異なる、生命個体を基底とする倫理学の可能性を具体化したという点において、科学思想史の領域に留まらない、フランス科学認識論の倫理的意義が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to define the ethical scope of French Epistemology, specifically, Canguilhem's medical philosophy and Simondon's theory of individuation. We pursued the following three topics: 1/Differences between Canguilhem's ethical perspective included in his medical philosophy, and the traditional ethical theories or Bioethics; 2/ Development of Simondon's biologic inspiration into the ethical issue in his theory of individuation; 3/ The responsibility of medical specialists under Canguilhem's idea of individualism in his medical philosophy. The above study elucidated the importance of French Epistemology in the field of ethics, as well as in the field of history of scientific thought.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：フランス科学認識論 倫理学 シモンドン カンギレム 個体

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代の先端医療技術がつけつける倫理的課題に関しては、生命倫理学において議論されてきたが、そもそも生命倫理が拠り所とする自己決定の主体という概念が、現代の倫理的課題に根本的に対応しうるような概念であるかどうかは、問題である。脳死の身体や人工妊娠中絶の問題に対し、自己決定の原則でもって答えることには限界がある。また、自己決定の原則が、専門家の責任回避として働くこともありうる。以上から次の研究が必要であると考えに至った。

(1)生命倫理学とは異なる観点から、現代の生命科学技術の中で生きる一身体としての人間の在り方、科学と倫理の関係について問い直す。

(2)生命倫理学の基本にある自己決定の主体とは異なる主体概念、個体概念を哲学的に遡行しながら探求することで、新しい倫理学の可能性につなげる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、生命科学の発展に伴う個体概念および人間観の変化が要請する、新しい倫理学の可能性を、個体概念に焦点を当てながら哲学的に考察しつつ、同時に、現代科学との連関の中で新しい個体概念を提起しているフランス科学認識論の思想に探ることである。特にアメリカにおける生命倫理学の興隆に先駆けて、フランスにおいて独自の医学哲学を展開したジョルジュ・カンギレムの思想と、カンギレムの方法を継承しつつ、現代の物理学、生物学、心理学、サイバネティクスの成果の具体的な分析を通して、従来の西洋哲学的伝統の中で理解されてきた個体概念に変わる新しい個体概念を提起したジルベール・シモンドンの個体化論に注目し、以下の点を明らかにすることを目指した。

(1)カンギレムの医学哲学と従来の倫理理論及び生命倫理学との射程の違い

(2)シモンドンの個体化論における生物学的着想の倫理学への展開

(3)カンギレムの医学哲学における個体主義と科学者の責任の問題の連関

以上の研究によって、現代フランス科学認識論において提起された問題を、現代倫理学の観点から再評価を試みた。

### 3. 研究の方法

(1)カンギレムの医学哲学と従来の倫理理論及び生命倫理学との射程の違い

カンギレムの医療関連の執筆物を渉猟する。複数の論文において、部分的に述べられている生命倫理学および生命倫理学が依拠する功利主義やカント倫理学に対するカンギレムの批判点をまとめ、カンギレムの医学哲学の倫理的射程と生命倫理学および生命倫理学が依拠する規範倫理学の倫理的射程との違いを浮き彫りにする。

(2)シモンドンの個体化論における生物学的着想の倫理学への展開

シモンドン自身が述べている、彼の個体化概念の倫理的意義に関する言及をまとめる。個体の存在様態に対する考え方の違いが、どのような倫理的な観点の違いを生じさせるかを検討する。特にシモンドンが生物学から着想を得たネオテニー化という概念に注目し、この概念がどのように倫理の問題に関わっているのかを検討する。

(3)カンギレムの医学哲学における個体主義と科学者の責任の問題の連関

カンギレムの医学哲学における個体主義の考え方と、『生命の認識』における規範形成力としての主体概念が、科学者の責任の問題とどのように結びつけて考えられているかを検討する。

### 4. 研究成果

(1)カンギレムの医学哲学と従来の倫理理論及び生命倫理学との射程の違い

カンギレムは、平均化、一般化をよしとするような健康概念、またそこからの逸脱が病気であるという考え方に対し、価値論的な生物学的個体概念から、健康や病気を理解する。ここに見出される倫理学は、一方で実験的治療に対し肯定的であり、他方で、QOL、人格主義、健康の自己管理という点に批判的であるという点において反生命倫理的である。さらにカンギレムは、正常なものの追求、人間主義的良心が倫理的であるとは考えない。根本的に一般性や普遍性は倫理を支えないと考える。規範の拠り所は集団の要請でも、普遍的デテルミニズムでもないと考えている点で、反功利主義的かつ反義務論的である。さらにカンギレムの医学哲学においては、匿名の何かではなく具体的な個人に向き合うことが強調されるので、この点は徳論と重なるが、カンギレムが規範の拠り所に考えているのは病人の苦しみであり、このような考え方は、徳論が拠り所にするようなアリストテレス倫理学(優れたものを規範にせよ)とも根本的に異なる。以上から、カンギレムの医学哲学が内包する倫理学が、従来の規範倫理学や、またそれに基づいて展開される生命倫理学の考え方と根本的に異なるものであることが明らかになった。

## (2) シモンドンの個体化論における生物学的着想の倫理学への展開

所謂個体を個体化の途上にある一つの位相とみなすシモンドンの考え方は、生物学におけるネオテニーという仮説(この仮説に基づく発達仕方の時間的な変化が生物の形態の特異性を決定づけることとなる)に負うところが大きい。シモンドンは、物理的個体化と生物学的個体化、生物学的個体化と心理学的個体化の関係をネオテニー化(個体化のスピードの減速)として理解し、この観点から哲学史上の伝統的な問題である心身問題の解決を試みた。ネオテニー化の対概念は老化であり、自らの環境に対する適応の幅を広げるための変化であるネオテニー化に対し、老化とは、個体化の減速ができないために環境に対する適応力を失うことと考えられる。シモンドンの倫理観は、価値 規範、社会 共同体、人間-機械、位相としての個体 オートマトンという対概念から形成されるが、これらの対概念は、ネオテニー化を老化の対極とみなす、シモンドン哲学固有の生命観に基づいている。

以上の研究から、ネオテニー化という生物学的概念、さらには近代的な主体概念の対極にあるような位相としての個体という考え方が、環境に対する適応力の拡大という意味において倫理的に積極的に解釈できる可能性を示した。

## (3) カンギレムの医学哲学における個体主義と科学者の責任の問題の連関

カンギレムの医学哲学における個体主義は、当時の優生学に対する批判的な視点に基づくクルト・ゴルトシュタインの全体主義と共鳴する考え方である。カンギレム哲学において、個体は次のような様相を呈する。生理学的事実とは区別される病人の実感、不確かな環境に対し価値的選択を行う生物個体、存在ではなく意味、価値、関係の中の項、多価性をもつ有機体。カンギレムにとって医師の責任とは、生体の特異性を引き受けること、すなわち、意味であり、価値であり、多価性をもつ個体に向き合うことであり、医学的良心とは、治療とは実験であるという自覚である。倫理的問題の所在は、実験をしているという自覚を麻痺させるもの、すなわち、個体を見えなくさせているものにある。具体的には、知識偏重型の医学部のプログラム、集団的要請に合わせた健康の自己管理、統一的尺度としてのQOL、医学的合理性と論理的合理性の混合が問題視される。一連の研究から、人間主義や人格主義とは異なる、生命個体を基底とする倫理学の可能性を具体化したという点において、科学思想史の領域に留まらない、フランス科学認識論の倫理的意義が明らかになった。

(4) シモンドンの博士論文 *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information* の翻訳書『個体化の哲学 形相と情報の概念を手がかりに』(法政大学出版局)を監訳者として出版した。この博士論文では、哲学史、物理学、生物学、心理学、社会学、技術論等、非常に多岐にわたる分野を見据えた観点から、個体化の問題が扱われており、その中で、各分野の専門用語やシモンドン自身の造語も多く用いられている。シモンドンを専門に研究している研究者以外には非常に敷居の高い文献であったが、翻訳書の出版によって、領域横断的なシモンドン哲学の全体像がより理解しやすくなり、シモンドン哲学へのアプローチの可能性が広がった。

(5) 『現代フランス哲学・思想事典』(ミネルヴァ書房)のシモンドンの個体化論、シモンドンの個体化と深く関わるドゥルーズ哲学、カンギレムの科学認識論の解釈に関わるザクラの項目を担当し、原稿を提出した。

(6) 鹿児島大学における研究倫理教育ワークショップにて「科学と社会」をテーマに講演を行い、フランス科学認識論の倫理的な射程、特にカンギレムの医学哲学における科学者の責任についての考え方を、実際に生じたいくつかの研究不正との関連において検討しながら、実践的な研究倫理の一つの可能性として示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤井千佳世
2. 発表標題 カンギレムの医学哲学における個体主義とその倫理的射程
3. 学会等名 日仏哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井千佳世
2. 発表標題 「シモンドンの個体化論の倫理的射程」
3. 学会等名 第1回 エピステモロジー・ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井千佳世
2. 発表標題 「科学と社会」
3. 学会等名 鹿児島大学FD委員会、高等教育研究開発センター共催 研究倫理教育ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジルベール・シモンドン、藤井 千佳世、近藤 和敬、中村 大介、ローラン・ステリン、橘 真一、米田 翼	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 638
3. 書名 個体化の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------